

資料を読み解くことから始める歴史の授業 — 通史を教えずに「歴史総合」の授業は可能か? —

沖縄県立球陽高等学校 小谷 良洋 (こたに・よしひろ)
※所属は2024年3月末現在のもの。

— 使用教材 —
『明解 歴史総合』



1 資料(史料)に触れる・歴史に触れる

歴史を専門に教えている先生方が歴史をおもしろいと思った瞬間はどんなときだったでしょうか？ 授業のおもしろい先生の話聞いて「歴史って楽しいな」と思ったときでしょうか？ ドラマや映画で歴史のドラマチックな部分に触れたときでしょうか？ 人それぞれの感動の瞬間があったらう。私にとって歴史をおもしろいと思った瞬間は「歴史に触れた」と感じたときである。その瞬間はいくつかあるが一つ例を挙げると、それは当時の人々を書いた書物や作品等の歴史資料に触れる機会を得たときだった。資料に触れることで当時の人々が考えたことや感じたこと、さらには数百年前の彼ら彼女らの人となりすら想像することができ、より歴史をリアルに感じることができたからだろう。

学習指導要領が改訂され、探究活動が重視されていくなかで、高校生も歴史資料に触れる機会が多くなっている。そこで、今回は帝国書院『明解 歴史総合』(以下、教科書)を使用して、従来の歴史の授業スタイルとは違う試みを紹介したいと思っている。それは通史の一斉授業を行わず歴史資料のみを中心に展開する「歴史総合」の授業スタイルである。いろいろと不十分な点も多いかと思われるが、「歴史総合」の新しい授業スタイルを作るためのチャレンジの一つとして読者の先生方に見ていただき、授業のエッセンスを共有できれば幸いである。

2 歴史資料の使い方

始めに、授業開きの際に私が歴史資料を取り扱うために重視している二つのポイントについて紹介する(図1)。それは、歴史資料の読み解き方と資料を見る視点である。まず、一つ目の歴史資料の読み解き方について紹介する。教科書p.10を開いて「**7** 歴史が叙述されるまでの

プロセス」を見てもらいたい。

そのページでは歴史が一つの体系化された物語として、どのように記述されていくのかを簡潔に表している。先生方に対し“釈迦に説法”ではあろうが、歴史とは各時代においてつくられた、あるいは紙等に書かれた資料を検証・精査し、それぞれのモノから分かった事象を集め、解釈し、そして、さらにそれらを世に発表した後、さまざまな人からの検証や批判に耐えて歴史叙述となるのである。これからの歴史の授業は、この歴史が叙述されるまでのプロセスをできるかぎり授業に落とし込むことが重要であると考えている。後で具体的な授業例は記述するが、資料を活用した授業を実践する前に、生徒にはこの歴史が叙述されるプロセスを一度示しておくよくだらう。

さらに、付け加えるとこの歴史が叙述されるプロセスの学習は個人だけでなくクラスメイトと共に行うほうがよくだらう。そのことによって、歴史が個人によってつくられるのではなく皆(社会)でつくり上げていくものだということを実感することができるのではないだろうか。協働学習が重視されている現在の授業ではこの視点

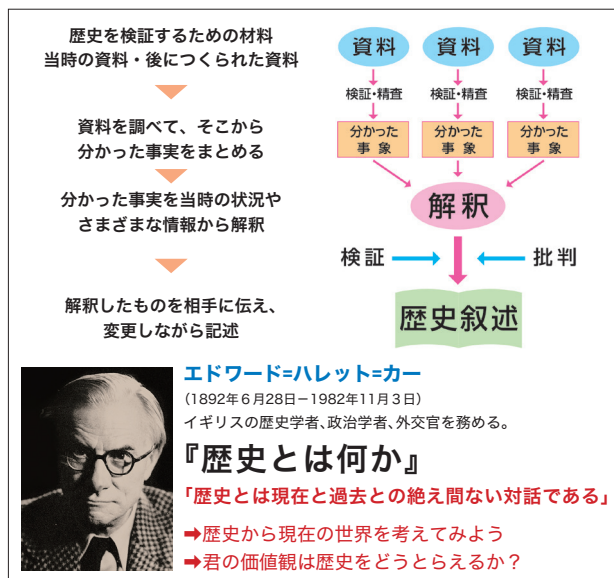


図1 授業開き—プレゼン資料— (写真提供 ユニフォトプレス)

史料 アメリカ独立宣言

われわれは以下の原理は明白のことと考える。まず、人間はすべて平等に創造されており、創造主から不可譲の諸権利をあたえられており、それらのなかには生命、自由、幸福追求の権利がある。次に、これらの権利を保障するためにこそ、政府が人間のあいだで組織されるのであり、公正なる権力は被治者の同意に由来するものである。

さらに、いかなる形態の政府であれ、この目的をそこなうものとなった場合は、政府を改変、廃止して、国民の安全と幸福とを達成する可能性を最も大きくするとの考えに従い、しかるべく機構をととのえた権力を組織して新しい政府を樹立するのが、国民の権利である。

〈金井光太郎訳〉

図4 「アメリカ独立宣言」(抜粋)

史料 フランス人権宣言

第一条 人は、自由、かつ、権利において平等なものとして生まれ、存在する。社会的差別は、共同の利益にもとづくのでなければ、設けられない。

第二条 あらゆる政治的結合*の目的は、人の、時効によって消滅することのない自然的な諸権利の保全にある。これらの諸権利とは、自由、所有、安全および圧制への抵抗である。

第三条 あらゆる主権の淵源は、本来的に国民にある。いかなる団体も、いかなる個人も、国民から明示的に発しない権威を行使することはできない。

*：国家をさす 〈辻村みよ子訳〉

図5 「フランス人権宣言」(抜粋)

史料 ナポレオン法典

[所有権の絶対]

545条 何びとも、公益上の理由にもとづき、かつ正当な事前の補償を受けるのでなければ、その所有権の譲渡を強制されることはない。

〈『西洋史料集成』〉

図6 「ナポレオン法典」(抜粋)

特質と読み解き」などを活用するとよいだろう。この資料の内容がいつ作られたのか？ どのような目的で作られたのか？ 誰に対して作られたのか？ あるいは丁寧な文章で書かれているのか？ 友達と会話するような文体か？ など、一つの資料から読み取れることをまるで探偵になったようにさまざまな角度から推測してみるのがある。資料から読み取れることは多岐にわたり、ただそれだけでも資料に触れる価値があると、資料を扱った人ならば思うところであろう。

話が少しそれてしまったが、本題の資料読み取りに入ろう。先に述べたように本時の問いの答えを導くための小さな問いは次の三つである。「①これらの文章から読み取れる価値観とは何か？」「②どのような目的で書かれた文章か？」「③どのような歴史的な変化がこの環大西洋で起こっているのか？」。まず一つ目の「①これらの文章から読み取れる価値観とは何か？」という問いと二つ目の問い「②どのような目的で書かれた文章か？」

に対しては次のような答えが返ってきた。

「①これらの文章から読み取れる価値観とは何か？」

- ・自由や平等、民主主義の価値観・所有権の価値観
 - ・主権は国民にある ・幸福になる権利
 - ・政府を改変し、廃止して新しく政府を作る価値観
 - ・社会的差別は共同の利益に基づかないといけない
- …etc.

「②どのような目的で書かれた文章か？」

- ・自由や平等、民主主義などの価値観を多くの人々に知らせるために書かれた。
 - ・新しい価値観をみんなに守ってもらうために書かれた。
- …etc.

多くの生徒が自由や平等、民主主義といった価値観を資料から読み取ることができ、それらの価値観が広められた様子を理解できたようだ。特に興味深かったのは「社会的差別は共同の利益に基づかないといけない」という点に着目した生徒がいたことであった。その生徒から「みんなの利益になれば社会的差別を行ってもよいの？」という質問を受けた。国民国家に関する授業は別に企画しており、今回は授業のポイントにはしていなかったが、国民国家を導く重要な視点であったので、逆に「なぜ、このような条文を入れたのだろうか？ この条文を入れた人は何を守りたいと思ったのか？ 何を恐れていたのか？ 君はこの条文をどう考える？」という問いを投げかけてみた。そのような話から生徒との会話が盛り上がる。私の理想としては、この生徒から発せられた質問をそのまま拡大させていき、授業の流れに落とし込めればと思っている。しかし、一斉授業でそれを実施するのは難しいので、やはり、新しい学びには授業の個別最適化をより追求していく必要があるのだろう。

最後の問い「③どのような歴史的な変化が、この環大西洋で起こっているのか？」については①と②の回答を踏まえて二人一組で考えてもらった。この作業の目的は、環大西洋地域における価値観の変化を認識させることと、①と②で出た回答をお互いに共有させることである。最後の問いに関しては以下のような答えが多かった。

「③どのような歴史的な変化が、この環大西洋で起こっているのか？」

- ・ヨーロッパやアメリカでは自由や平等、民主主義の価値観が出てきて、人々にそれらを守らせるためにアメリカ独立宣言や人権宣言、ナポレオン法典が出てきた。
 - ・戦争や革命によって自由や平等、所有権などの新しい価値観が生まれた。
- …etc.

三つの問いに答えた後、授業の最後に本時の問いについて記述させてみた。本時の問いは「ヨーロッパや北米大陸の環大西洋地域では人々の価値観にどのような変化があったのだろうか？ また、その変化についてあなたはどのように考えるか？」である。本時の問いを記述するにあたっては二つの点を大事にして書いてもらうように心がけた。一つ目は過去の視点を大事にして書くこと。二つ目は自分の状況や現在の社会に照らし合わせて記述することである。本時の問いに記述する字数は80～120字あたりがよいだろう。結果、以下の回答が寄せられた。

本時の問い「ヨーロッパや北米大陸の環大西洋地域では人々の価値観にどのような変化があったのだろうか？ また、その変化についてあなたはどのように考えるか？」

- ・ヨーロッパや北アメリカ大陸では独立戦争や革命が起こり、自由や平等などの考え方が生まれ、それらの価値観による国が誕生した。現在ある自由や平等の価値観が当時の人たちの努力によってつくられたことだと知り大事にしなければならないと感じた。
- ・ヨーロッパや北アメリカ大陸で自由、平等が生まれた。アメリカ独立宣言では自由や平等、幸福の追求の権利が書かれていて、古い時代とは違う新しい時代が来たことを宣言する内容の文章だと分かった。
- ・アメリカ独立戦争などの影響で幸福の追求という価値観が生まれた。日本という国は幸福を追求できる国ではないと思うので、幸福を追求できるようにしなければならないと思った。

…etc.

歴史の叙述というにはいまひとつ物足りないと感じる回答が多かった気はするが、環大西洋革命を自分事としてとらえられている生徒は多かったのではないかと思う。特に回答例で、幸福の追求という価値観が日本にあるのか疑問を出している生徒がいるように、アメリカ建国の父たちの国づくりの理想から「私たちの生きる社会や国はこうなってほしいな、あるいはこうあるべきだな」と生徒が感じるような授業ができたことは、ひとまず授業の成果としてはOKということにしておこう。

4 まとめ

今回の授業を読者の先生方はどうお感じになっただろうか。恐らく、本単元はもっと丁寧に扱うべきだと感じた先生も少なくないのではないだろうか。正直なところ、この授業方法は私にとっても自身の授業スタイルを破壊する実験的な試みの一つである。

インターネットでの個別学習や何でもスマートに答え

てくれる人工知能の発展、目まぐるしく変化していく現代社会の中で、現在の生徒の教育環境は今まで以上に大きく変化している。その変化の中で、われわれの授業スタイルも従来型の方法を打ち壊し、それこそ、今回の授業のトピックのように、「革命的な」変化が必要なときだということを、日々の授業の中で多くの先生が感じておられることだろう。従来とは異なる全く新しい授業スタイルを見つけるためにも、ダイナミックに授業を組み立て直すチャレンジに、多くの先生方と共に取り組んでいきたいと考えている。

今回の授業では、通史にこだわらず、ヨーロッパと北アメリカ大陸を挟む環大西洋地域で自由や平等、民主主義などの価値観が具体的な政治の世界に体现され、根づいていった様子を資料から考察してもらった。恐らく通常、多くの先生方が、通史を学ばせながらさまざまな資料を紹介したり読み取らせたりする方法を選んでいるのではないだろうか。今回紹介した授業では、資料から通史を学ぶというスタイルに変えている。特に、通史には言及せずに、先に資料を読み込ませ、その時代、その地域にどのような変化が起こったのか？ ということに焦点を当てて18世紀から19世紀の環大西洋地域という大きな枠組みの中で授業を展開している。生徒はその中で資料集、教科書などを使い、**授業資料①**（**図2**）を参考にしながら、みずから通史を読み解いていくのだ。つまり、「通史の中で資料を使う」のではなく「資料を読み取り通史を学ぶ」のである。

そして、生徒は資料を検証・精査し解釈を加えて記述する。そこには自分の価値観だけでなく、他者の意見を取り入れながら協働して歴史をつくり上げていくということが大事であることを重ねて申し上げておきたい。

歴史というのは決まっているものではない。歴史の評価は各時代の価値観によって解釈され、川の流れが常に変わるように変化しているのである。それは、E=H=カーが述べるように現在と過去との対話であり、現在の人々、つまりわれわれ自身が常に歴史を再評価し書き換えることができるということである。もし生徒がそのことに気付くことができるのなら、生徒たちはもっと歴史を学ぶことに積極的になり、歴史に興味を持ってくれるのではないだろうか。